第二章　『古今和歌集』六一六番歌と『伊勢物語』第二段歌の再検討
——同一異相の和歌をめぐって——……277
一　『古今和歌集』六一六番歌の位相……277
二　『古今和歌集』六一六番歌の構造——新解釈……279
三　『伊勢物語』第二段歌の再検討——新解釈……282
四　『古今和歌集』六一六番歌と『伊勢物語』第二段歌の関係
——片桐洋一修正説の批判的検討——……288
五　同一異相歌を視野に入れた文学史の構想……291
第三章　父に早逝されて零落した姫君たち——空蟬・夕顔・末摘花——……293
一　空蟬の思惟——身の程意識の内実と源氏拒否——……293
二　夕顔の不安——もの怖じと隠された誇り——……301
三　末摘花の意志——〈静止する行動〉を支えるもの——……309
原題・初出一覧……315
あとがき……317
索引……左開き……001

はしがき

本書は、〈本編〉において『紫式部日記』についての論考十三編を収め、それぞれをもって一つの章とした。また、十三の章を適宜分かちて、三部構成とした。

第一部（七章）は、「『紫式部日記』の成立」と題して、もっぱらその形態および成立過程について考究したものをまとめ、第二部（四章）は、「『紫式部日記』の諸相」と題して、本作品の文学としての側面について自由に論じたものを、そして第三部（二章）には、「紫式部の影像」と題して、紫式部の著作方法および史的存在性について論じたものを置いた。第一部第二章から第二部第十一章にかけての配列は、発表年月順とも重なっている。

第一部の章数が過半を占めるのは、以下のような認識に基づいている。

この作品の研究は形態論に始まり、同じく形態論に終わるといってよい。形態論は、作品の原形から現存形態に至る成立事情の究明を目指すものであるが、その過程で執筆意図・表現・構造・読者意識・作者等諸要素についての検討が当然ながら要請されることになり、またそれらの検討がおのずと形態の究明に寄与するという関係になっている（本書第一章「一」）。

研究の始発時においては、正面からこの難題に取り組んでいたのだった。しかし、第一部に収める六編（第一章を除く）の発表年は、一九七九年から一九八六年に収まる。四十年から三十余年も前のことになる。古色蒼然、である。結局のところ、この間に独自の体系的形態論は実現できなかった。

そしてその後も、『紫式部日記』の一部または周辺をさまよう長い年月を送ることになる（第二部・第三部）。この

間に刊行された次の優れた研究成果などを、ただ横目で見るほかはない体たらくであった。

福家俊幸『紫式部日記の表現世界と方法』（武蔵野書院、二〇〇六年九月）

原田敦子『紫式部日記 紫式部集論考』（笠間書院、二〇〇六年一二月）

村井幹子『紫式部日記の作品世界と表現』（武蔵野書院、二〇一四年三月）

増田繁夫『評伝 紫式部―世俗執着と出家願望―』（和泉書院、二〇一四年五月）

とは言え、その間、明確な形にはならないながらも、朦朧とした意識下に時々浮かんでは消える幻影があり、これを今回とりあえず大雑把に掬い取ってみたのが、第一部第一章「二」～「七」の発想なのである。これが、本書刊行の契機となった。

ここに至るまでの私の歩みは、おおよそ三期に分けられるように思う。まさに暗中模索、試行錯誤、右往左往の連続だった第一期（ほぼ本書第一部）。成立過程にはほとんど触れ得なかった第二期。そして、最新の研究成果に触発されて成立過程への新しい着想を得た第三期、ということになろうか。

このような経緯があるために、「第一章」と「第二章以下第七章まで及び第十一章」との間には、考察の結果に齟齬をきたす記述が一部見られるが、暗中模索、試行錯誤、右往左往の実態を記録するために、あえて整合性を求めることをしなかった。それぞれの論考で指摘した事実（の可能性）は、観点を変えてみるなら立論当初とは相違する相貌を示すことがあり得る、との思いからでもある。あるいは、いずれも第一章「二」～「七」の着想・仮説に収束する可能性を十分に含んでいる、との見通しゆえとも言えようか。

なお、本書中の各章の表題、内容ともに原則的に初出時のそれを踏襲しているが、編成上の都合および一書としての統一を図るために、各章表題の一部語句を改変し、また各章を複数の節に分けて見出しがなかったものにはそれを付し、さらに「注」における出典の表記方法を改め、加えて一部の文末表現を改めるなどの手を加えた。しかし、一書としての一貫性を疑わせる事態が生じても、文脈および結論を改めることはまったくしていない。

「付編」収載の事情については、「あとがき」に記した。